大分の史跡－古宮古墳－

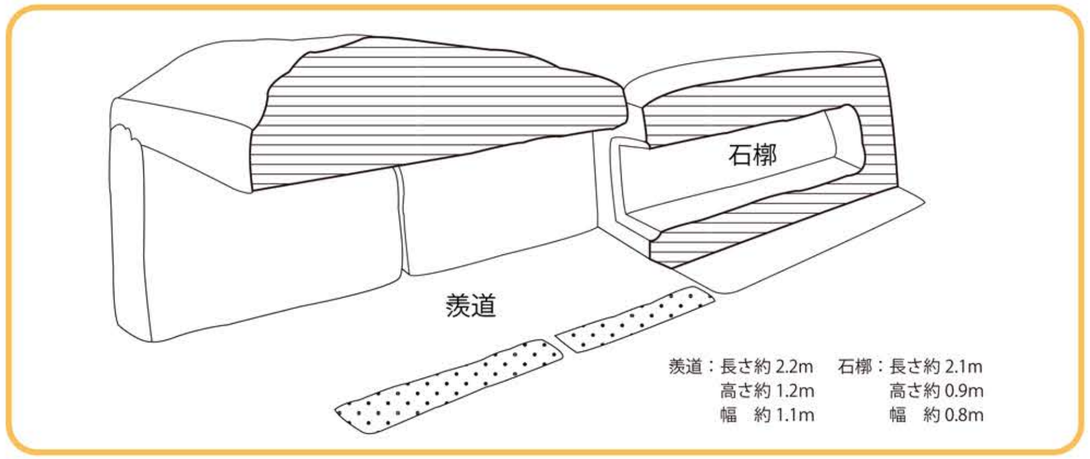
古宮古墳は、椎迫丘陵の南側斜面にある南北約12.5m、東西約12mの方墳です。7世紀後半の築造と考えられ、九州で唯一の横口式石槨をもつ古墳として、昭和58年（1983）に国の史跡に指定されました。

整備された古宮古墳

大分君の墓

古宮古墳のようなくり抜き式の構造をもつ横口式石槨は、7世紀中頃前後に畿内の貴族の間で流行したもので、九州では他に例がないことから、被葬者はヤマト王権と深くかかわっていた人物と推定されます。「日本書紀」には、大分君恵尺・稚臣という2人の豪族が壬申の乱（672年）で活躍したことが記されており、与えられた高い官位から、恵尺がその有力な候補者として考えられています。

国内には数多くの古墳がありますが、この古墳は被葬者がほぼ特定できる数少ない古墳の一つです。



古宮古墳模式図

壬申の乱で活躍

壬申の乱は、天智天皇後の皇位継承をめぐって、大海人皇子（天皇の弟で後の天武天皇）と大友皇子（天皇の子）が争った日本古代史上最大の内乱です。この戦いで、大海人皇子側についた大分君恵尺は人質となっていた皇子の息子を助け出し、稚臣は最大の激戦地であった瀬田の戦いで単身敵陣に切り込むなど勝利に大いに貢献しました。

古宮古墳周辺地図

風水思想からみた古宮古墳

風水思想で守られる

古墳は、「気」が一番集まる幅の狭い丘陵の先端に立地し、北側の高まりを「玄武」、東側の稜線を「青龍」、西側の稜線を「白虎」、南側に流れる毘沙門川（住吉川）を「水」とした風水思想にもとづいて造られているのではないかと考えられています。